

## 悪の帝国

十の災い、イスラムと神の裁き

2015年1月30日 アシエル・イントレーター

十の災いは、聖書の中で最も壮大な、そして詳細な物語の一つです。この物語は、神の裁きを理解する土台を与えてくれます。

モーセがエジプトに戻る前、神は彼に伝えました。主は「ファラオの心をかたくなにする」。(出エジプト 4:21)しかし、神は第8番目のいなごの災い(出エジプト 10:1)まで、かたくなにすることを実行しませんでした。ファラオはすでに自分の心を7回も最初の7つの災いでかたくなにしました。それぞれ、ファラオには恵みと赦しの機会が与えられましたが、すべて7回彼は悪い反応をしました。ファラオが自分の自由意志で心をかたくする、そのかたくなさが「満ちた」後にのみ、神は裁きの行為として、彼の心をかたくなにします。

モーセがエジプトに派遣される前、神は彼の杖を地に投げよと命じ、それはヘビに変わりました(出エジプト 4:3)。これはヘビに象徴される、悪魔的な力に対するモーセの霊的な権威のしるしです。しかし、そこには別の理由があります。神はモーセが知らない何かを知っていました。

モーセは砂漠に40年いました。状況は、閣僚レベルの大臣もオカルト礼拝に関わり、彼らは杖をヘビにすることが出来(出エジプト 7:12)、水を血に変えることが出来(出エジプト 7:22)、ナイル河からカエルを呼び出す事が出来る(出エジプト 8:3)時点まで墮落していきました。魔法は盛んに用いられ、エジプトの王たちはヘビのついた冠をかぶっていました。それゆえ、神は力を持ってこれらの悪魔的な霊を撃退させるためにモーセに事前に準備させました。

## 目には目を

初子の死は最後の、最悪の災いでした。覚えて頂きたいのは、エジプトのファラオはすでに80年間も罪の無い子どもたちを殺害してきました(出エジプト 1:16)。神の裁きは常に恵みと、常に完全なる義が先に立つのです(あなたが他者にする事は、あなたにされるであろう)。

エジプトでユダヤ人の子どもたちが殺害された事は、最初の種類の「ホロコースト」であり、その後ハマーン、ヘロデ、ナチス、そして現在はイスラムの聖戦が続きます。イスラム教は、聖書の預言すべてに続く、モーセやイエスを含み、ムハンマドが最後の神の預言者であると主張します。しかし、皮肉にも、これら聖戦主義者は、ユダヤの聖書の預言者または使徒よりも悪のファラオとの共通点があります。

聖戦主義者は性的な不品行の罪が広がる西洋社会に裁きをもたらしたいと思っています。これらの非難にはいくつかの真実があります(黙示録 17:16-17 と比較)。しかし、イスラム主義者は数千もの罪の無い女子を強姦し、それはまた性的な不品行の形でもありますし、そして、殺害し嘘をつき、それはまた十戒に反するものです。神の預言は神の倫理的な法自身に従う事を要求します。

十の災いの後、エジプト軍は紅海で滅ぼされました。これらの軍隊は武器を持ち、殺そうとし、三世代もの暴力的な奴隷制によって抑圧されてきた無力な群衆を追いかけました。神の裁きは厳しいものでした。それは、犯した罪が大変残酷だったからです。

## 第二ラウンド

神は裁きつかさです。義なる裁きつかさです。聖書は私たちに何度も何度も、神の裁きは完全なる義である事を思い起こさせます(詩篇 96:13;98:9;黙示録 15:4;19:11)。神の裁きには以下が含まれます。

1. 倫理的な正義
2. 恵みを与える
3. 明確な警告
4. 法的手続き
5. 預言の倫理的な必要性

イスラムは神の裁きもたらすと主張しますが、上記にはそれは一切ありません。

モーセの時代のエジプトのファラオは恐らく歴史上最も悪魔的な帝国でした。しかし、聖書の預言から見られるように、そのような悪の帝国は再び興るのです。それはよりひどいものになるのです。それは、世界的に殺人的、大量虐殺、悪魔的、非人道的な帝国となります。エジプトからの脱出は歴史として聖書に記録されていますが、預言でもありました。終わりの時に何が起こるのか、それはエジプトで起こった事に似たものとなるでしょう。

[注:ヘブライ語の語根(Ts-R-R)רצחは反キリスト(ツォレル)、艱難(ツァロット)、そしてエジプト(ミツライム)と同じです。]出エジプトの物語は、終わりの時の神の裁と災いを理解する聖書の枠組みを与えてくれます。

## 使徒行伝の中の「クリスチャン」

アリ・ソーコラム

新約聖書の中で「クリスチャン」という言葉が初めて出てくるのは**使徒 11:26**—「弟子たちは、アンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった」そこでパウロとバルナバは異邦人に教え、多くを信仰へと導きました。これらの新しい信者または弟子はイエシュアに従う異邦人として「クリスチャン（メシアニック）」と呼ばれました。「弟子」(マテテス)という言葉の意味は「学ぶ人」です。

パウロ、バルナバそして他のユダヤ人信者はユダヤ人の「その道」に従う者としてのアイデンティティを維持していました(**使徒 9:2**)。「クリスチャン」という言葉は新しい弟子を指しています。これらの弟子はかつて異教徒でしたが、今や新しい信者なので、彼らに新しい名前が必要でした。その一方で、彼らは救われるのに割礼は不要でしたし、パウロやバルナバのようなユダヤ人になる必要もありませんでした。ただ、彼らには、彼らの周りにはいる異教徒と区別するために名前が必要でした。

その言葉に関係するものが、新約聖書の他の二箇所にも反映されています。**使徒 26:28** では、自身が異邦人であるアグリッパ王はこの言葉を使い、彼は、自分は改宗に近いと述べました。| **ペテロ 4:16** においては、多くの国々から巡礼がある事が述べられ、それは、| **ペテロ 2:10**、にある通り、彼らは「一つの民」ではなく、今や「神の民」とであると述べています。

この用語は次の御言葉の真理を反映しています。**エペソ 2:11-13** の「新しい一人の人」(メシアの体、またはイスラエルの国)ユダヤ人と異邦人で構成される--それぞれがはっきりとしたアイデンティティの差を維持しつつ、信仰と愛によって一つとなります。

## エゼキエル書の概略-パート 2

このパート 2 では、アシェルはエゼキエル書の最後の預言的な章についての概略に焦点を当てます。彼はまた、神の預言的タイムテーブルにおいて、私たちが今どこにいるのかについても語ります。英語で視聴される場合、[こちらをクリック](#)して下さい。